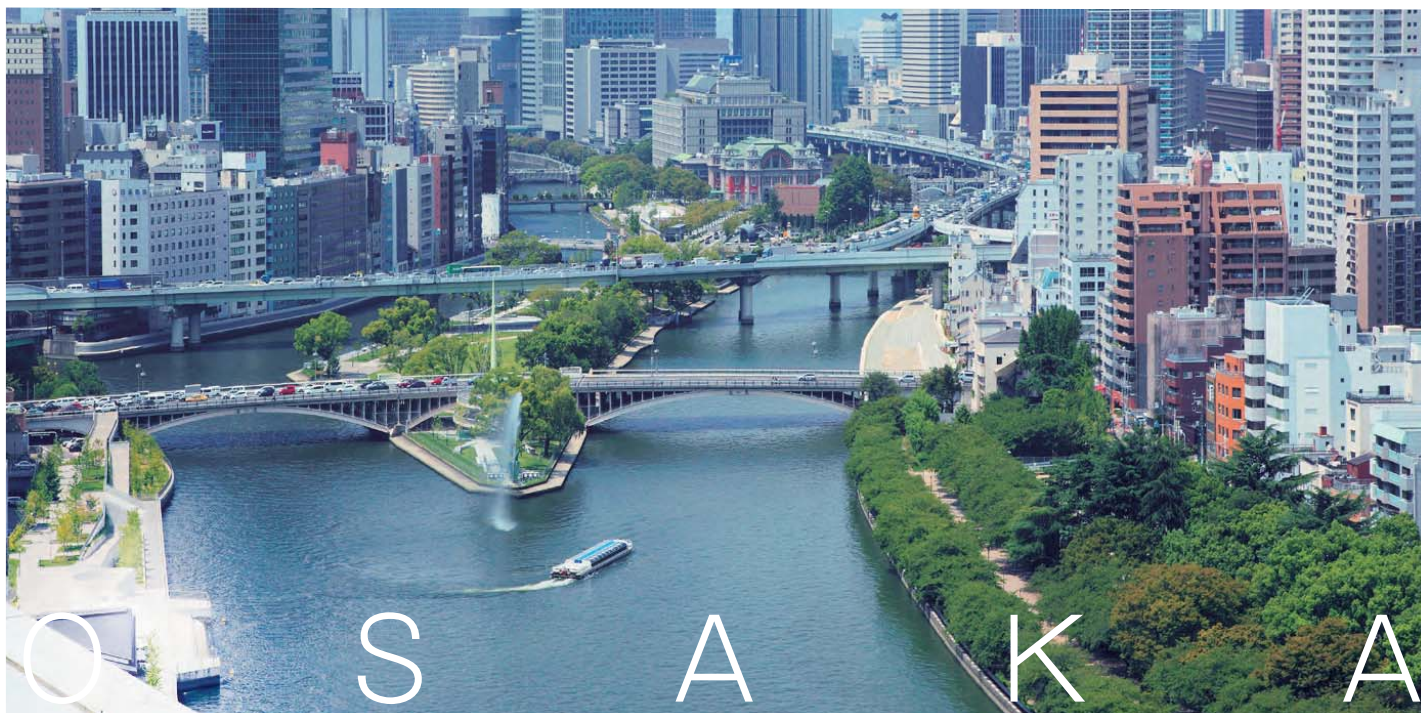


日本も! 元気にする 青年海外協力隊 大阪編



その経験を大阪で活かし その経験を日本の未来へつなげる

新たなステージ、大阪で活躍する 青年海外協力隊OB、OG。

日本から世界 88 カ国の開発途上国へ
 今まで約 4 万 2 千名もの青年海外協力隊が派遣されてきた。
 彼らは、赴任先の国々で地域に入り、現地の言葉を話し、
 文化の壁を乗り越えて地道に活動を続けている。
 そこでは、現地の人々から人と人とのつながりの大切さを学ぶ。
 協力隊の活動を終えた OB、OG たちは、その経験を糧に
 日本の新たなステージ、大阪で奮闘している。
 どのような環境でも最善を尽くす姿勢は、協力隊の経験で得たもの。
 大阪で働く 8 名の OB、OG、その逞しい姿をご覧ください。



なかがわ なつぎ
中川 夏姫さん (P4-5)

▼赴任地
タイ
▼箕面市船場東
クモノスコポーレーション(株)
独自開発のひび割れ計測システムで
世界のインフラを守る



つじの やすこ
辻野 恭子さん (P6-7)

▼赴任地
エジプト
▼大阪市中央区北浜
ミツワ株式会社
ビジネスを通して世界につながり
日本のために働く



ぬまがわ こうた
沼川 広太さん (P8-9)

▼赴任地
セネガル
▼豊中市新千里西町
SCSK 株式会社
将来は途上国でも
IT インフラを支えたい



かねみつ さぶろう
兼光 三郎さん (P10-11)

▼赴任地
モザンビーク
▼茨木市東奈良
大阪府茨木市立東奈良小学校
子どもたちの心を世界へ広げ
身近な人とつなぐ



きたがわ あゆみ
北川 亜友美さん (P12-13)

▼赴任地
ラオス
▼寝屋川市池田中町
摂南大学
大学と海外の現場
学生たちの学びの往還を支える



ささき なみ
佐々木 菜実さん (P14-15)

▼赴任地
ガーナ
▼大阪市住之江区南港北
大阪府総務部
エネルギーな大阪で人々を支え
愛される職員になる



やまだ こうた
山田 浩太さん (P16-17)

▼赴任地
タンザニア
▼河内長野市原町
河内長野市 市民生活部
住民主体の地域活動を支え
力強い地域をつくる



たかひし えいち
高橋 永知さん (P18-19)

▼赴任地
ウガンダ
▼泉南郡田尻町
厚生労働省 関西空港検疫所
関空の検疫所で
感染症から日本を守る



独自開発の ひび割れ計測システムで 世界のインフラを守る。

中川夏姫

「KUMONOS」を普及し 測量技術で 構造物の維持管理に貢献

道路や橋、トンネルやビルなどのコンクリート構造物の寿命は、およそ 50 年とされている。構造物の老朽化を知る上でも継続的な計測や調査は欠かせない。クモノスコーポレーション株式会社は、こうした構造物の調査や施工管理などを行う会社だ。同社が開発した「KUMONOS(クモノス)」という新ひび割れ計測システムは、100m 先にある 0.4 mm のひび割れを計測できるという画期的なシステム。従来は構造物に足場を組んで目測していたひび割れだが、高い橋梁やビルなど離れた構造物でも、安全で正確、かつスピーディに計測できるという。

日本で導入が進むこのシステムを海外でも展開するため、同社は、開発途上国のなかでも都市化が進むタイに着目し、その第一段階として ODA 普及・実証事業を行っている。タイで青年海外協力隊として活動した中川夏姫さんが、その経験を生かして、同社のこの事業に携わっている。



現在この事業ではタイのチュラロンコン大学と連携し、「KUMONOS」による現地での計測データを同大学に提供、

「KUMONOS」の有用性を検証中だ。タイ語を駆使して現地のアポイントをとり、現場調整にあたる中川さん。タイのビジネス用語や専門用語については、入社直後から勉強し続けているそうだ。「従来の計測技術に比べて『KUMONOS』は精度、計測者の安全、コストの各側面で高いメリットがあります。コンクリートの損傷具合を正確に記録できるシステムです」と中川さんは説明する。

インフラを支える 「守る測量」で タイの人々の命を守りたい

協力隊の活動で得たスキルが、今の中川さんの仕事を大きく支えているのは確かだ。だが、中川さんは、語学の修

赴任地
タイ
赴任地での職種(活動分野)
日本語教師



箕面市船場東
クモノスコーポレーション(株)
国際事業部

大学卒業後、青年海外協力隊の活動でタイへ。帰国後の2015年、クモノスコーポレーション株式会社に入社。国際事業部に勤務する。

得や風習、習慣に精通することだけがすべてではなく、その国の人々の考え方を深く知りつつ、時に自らの意見を貫く必要もあると話す。日本語教師をしていた中川さんは、生徒たちに優しいだけでなく、時に厳しく指導したこともあった。

「タイでは、できる生徒ができない生徒にテストの答えや宿題を見せてあげることが多く、それを優しさだと思っているようでした。でも、私はそうではないとはっきり言いました。できない仲間に手助けをしてあげたら、その仲間の学びのチャンスを奪ってしまう」と。タイの生徒たちに少しでも日本語のスキルを上げてもらいたい。その気持ちを買き、気が付けば、周囲のタイの生徒たちが、中川さんについてきてくれたのだった。

タイから帰国した中川さんは、クモノスコーポレーション株式会社に就職。タイに関わる業務のほか、国内での業務にも精を出す。中川さんは、国内の補助金事業や助成金事業の申請等に関する提案書や計画書の作成、さらにプレゼンテーションも行っている。実際に、中川さんが関わった提案書で採択された

苦勞したタイ語の修得 どんな時も逃げずに取り組んだ



中川さんが赴任した先は、首都バンコクから車で 6 時間もかかるタイ南部のチュムポン。ここにあるスィーヤーパイ中高校で日本語教師として活動した。日本語で指導する予定だったが、実際にはタイ語で指導しなければならぬ状況で、日常会話以上のタイ語がおぼつかなかった中川さんは、苦勞したそうだ。

「タイ人の先生の授業を見学して、タイ語でどうやって教えるのかを必死に考えました。環境に慣れるのも、人々に慣れるのも精一杯のなかでしたが、タイ語を使わなければ、生徒たちが耳を

傾けてくれなかったのです」。中川さんはタイ語をひたすら勉強。そして、タイ語検定を受けたと生徒たちに話すと、生徒たちが驚いたという。「『先生がそんなに勉強するなら、私たちももっと勉強する』と言ってくれました。相乗効果となったのはうれしかった」と当時を振り返る。




ものもあり、確実に実績を上げている。



「ニッチな市場ですが、正確に計測することによって、構造物の損傷を把握し、

老朽化の診断につながるデータとなります。国内はもちろん、タイのインフラを支え、間接的にタイの人々の命を救うことにつながる『守る測量』。私は、このシステムを誇りに思います」と熱く語る中川さん。タイへの思いを胸に、中川さんは全身全霊、構造物を守るシステムの普及に取り組んでいる。

上司に聞いてみた!  good job!

弊社では、タイにおいて「KUMONOS」を活用した維持管理手法の ODA 普及・実証事業を進めています。中川さんは、現地でのアテンドや通訳をそつなくこなし、私たちが相手からすぐに返事をほしい時にも素早く対応してくれるので頼もしいです。協力隊の活動でタイの人々とのやりとりを心得ているのでしょう。

弊社が開発途上国に進出するのは、販路拡大に加え、自社開発システムの技術移転という大きな目的があります。将来、タイに現地支店も計画しているため、中川さんには、大いに期待しています。

クモノスコーポレーション株式会社 企画開発部 部長 藤田 誠二さん



ビジネスを通して 世界につながり 日本のために働く。

辻野 恭子

エジプトと関わりたい その思いがあって 民間商社へ就職

ミツワ株式会社は、国内外の合成樹脂原料を国内の製造業者へ販売、プラスチック製品においては、成形加工などの製造工場もつ、商社でありメーカーだ。近年、グループ会社を統合し、国内拠点を拡大、繊維製品の分野にも進出している。



同社の大阪支店で営業職として働く辻野恭子さんは、自社工場で製造したプラ

スチック製品や、海外から輸入する原料などプラスチックに関するさまざまな商材を販売している。大阪府内をはじめとする西日本、そして北陸まで、取引先の工場を訪ねて商談を進める。小さな身体ながら、明るさとパワーは人一倍だ。同社に入社した理由を尋ねると、「プラスチックは原油でできているので、中東から運ばれてくることも多い。大好きなエジプトと将来関わっていけると考え、この会社に決めました。いつか、アラビア語を使ってビジネスをしたい」と笑顔で答える。

昨年、辻野さんは中国、台湾、ベトナム、タイ、ドイツの展示会や見本市に出かけた。会場では、何社もの担当者に話しかけ、自社商品を PR して販路を開拓。ドイツの展示会には、中東のメーカーも多

く参加していて、そのなかにエジプトのブランド関係者もいた。辻野さんは、得意のアラビア語で話しかけた。「思っていた以上に手応えを感じました。彼らも英語は堪能ですが、本音ではアラビア語を話せる人と取引したいようでした」。目下、取引開始の交渉中だという。

「すぐにエジプトへ行けるわけではありませんが、回りまわって、エジプトとつながっていると感じる時、この会社に入社して良かったと思います」。

まずは日本のために働く そして顧客や同僚に 人として接していきたい

辻野さんは、大学時代の留学と、青年海外協力隊の活動というエジプトで過

赴任地
エジプト

赴任地での職種(活動分野)
村落開発普及員



大阪市中央区北浜
ミツワ株式会社
大阪支店

大学在学中にエジプトに1年間留学。卒業後、教育関係の出版社で2年間勤務。退職後、青年海外協力隊の活動でエジプトへ。2013年、ミツワ株式会社に入社。大阪支店で営業職として勤務する。

ごした2つの貴重な体験がある。留学は、エジプトの国費で賄われていたものだが、現地では、情勢もあって小学校や中学校へ行けなかった人が大勢いたという。そのような中、大切な国費で自分を留学生として受け入れてもらえたことは忘れられない。「いつかこの国に恩返しをしたい」という感謝の気持ちが協力隊の活動に結びついた。

協力隊に参加する前、辻野さんは、帰国したら国の機関や NGO などで働くことを考えていた。営利目的の企業では、途上国を支援することはできないと思い込んでいたからだ。「現地で考えたのですが、国の支援や援助は、それが終了すればおしまいです。一方、民間企業なら、互いに利益が得られる間は、ずっと良好な関係を保てると思ったのです」。

そして、「どんなにエジプトを想っても、私は日本人。愛国心が強い彼らを見ると、自分が恥ずかしくなりました。帰国後はまず、日本のために働こうと思うようになりました」と辻野さんは話す。

自ら考え、自ら行動していく辻野さん。

同僚と過ごす時間を大事に 現地のスタイルで信頼を獲得した



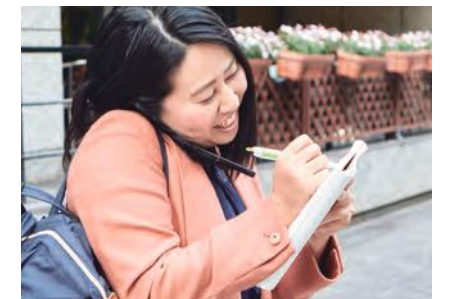
赴任先は、紅海に面したリゾート地、ハルガダ。辻野さんは、社会連帯省の支局に所属し、職業訓練所(NGO)で女性たちが作る手工芸品のマーケティングや販売を支援した。外国人である自分を受け入れてもらうため、辻野さんは、敬虔なイスラム教徒である地元の女性に合わせて服装に気を配り、朝は所属先で同僚と朝食を食べ、日中は NGO を巡回、夜は同僚女性の家庭を訪ねるなど、できるだけ同僚と過ごすようにして信頼を獲得していった。また、訓練所の製造商品は、納期が遅れがち。

辻野さんは、同僚やスタッフに「自分たちの商品売りたければ、納期は守らなければならない」と訴えた。スタッフを叱った後は、その日のうちに自宅を訪ねて家族に会って彼女をほめることも忘れない。「人とのつながりや相手を知る努力は、協力隊の活動で鍛えられました」と辻野さんは話す。



今の目標は、得意先や同僚に対して、営業マンでなく一人の人間として接していくことだ。「お客さんの多くは、工場をもつ事業主。経営者としての悩みも多いことでしょう。その1%でも2%でも私が一緒に背負うことができれば…」と心の内を語る。「エジプトでは、人と人の関係が暑かしいほど濃密でした。今ではそれが、懐かしい。日本では私が厚かましくならない

ように気をつけています」と笑う。自分の歩む道を見つけた辻野さんは、伸びやかに前へ進んでいる。



ミツワ株式会社 常務取締役
財務管理本部本部長 兼 大阪支店長 平田 香織さん

上司に聞いてみた!



辻野さんは、意欲的に行動するタイプ。企業社会では、女性ということでも弱く見られがちなのですが、彼女は信念を持って行動しているので周りの社員のいい見本になります。「出る杭は打たれる」と言いますが、たとえ打たれてもめげずに前に進んでほしいです。大阪支店をはじめ、弊社の営業職は女性も多いのですが、それは経営トップが、30年も前から男女問わず雇用してきたからです。これからも、彼女の活躍が、後輩の見本になってくれることを期待しています。



将来は途上国でも ITインフラを支えたい。

沼川 広太

顧客のシステムの 安定性を支える仕事 苦勞もやりがいもある

SCSK 株式会社は、システム開発から IT インフラ構築、IT マネジメントなど幅広いサービスを提供するグローバル IT サービスカンパニー。IT 企業のなかでも売上高が上位にランクする業界をリードする企業だ。同社に勤務する沼川広太さんは、エンジニア。現在、商社向けの IT インフラを支える運用チームのリーダーだ。顧客が使用するシステムの安定した動作を維持し、改良や補修をしながら、日々新たな課題に取り組んでいる。

「ネットワークや社内システムは、普段あまり目にしない部分ですが、道路や水道、電気など同じように大事なインフラです。使う人が、安定した利用ができるようにす

るのが、業務です」と沼川さんは話す。技術が日進月歩の IT 業界では、常に新しい知識や技術を求められる。システムに支障が起これば、緊急の対応も迫られる。プレッシャーもかかるが、システムの復旧後、顧客から感謝の気持ちを伝えられると、続けてきて良かったと感じるそうだ。「基本的に、顧客からシステムを任されている立場です。トラブルがあってはならないのですが、予想外の原因で障害が出た場合は復旧に、新たな課題が持ち上がった時には解決に全力を注ぎます」と沼川さん。



日本企業で働く一員として 今後は途上国との関わりも 考えていきたい

沼川さんは、入社 5 年目の時に、社内のボランティア休業制度を利用して2年間、青年海外協力隊の活動をした。それまでボランティアに興味はなかったが、その前に訪れたカンボジアで、現地の人々が東日本大震災について日本人をとて心配してくれていたことが印象に残っていた。なぜ、途上国の人々がこれほど日本を心配してくれるのか。調べてみると、日本からカンボジアへの支援は数えきれないほど行われていて、なかでも協力隊の取り組みが大きく、改めて活動の意義を知った。関心をもった沼川さんは、社内にボランティアに参加できる制度があることを調べ、そ

赴任地
セネガル
赴任地での職種(活動分野)
PCインストラクター



豊中市新千里西町
SCSK株式会社
ITマネジメント事業部門
基盤インテグレーション事業本部
流通基盤インテグレーション第一部 第一課
大学を卒業後、大学院の理工学研究科修士課程を修める。2007年、CSK(現在のSCSK)に入社。社内のボランティア休業制度を利用し、現職参加派遣で2012年から青年海外協力隊の活動でセネガルへ。帰国後も引き続き、同社でエンジニアとして活躍する。

の制度を利用して協力隊で活動することに決めた。
「現地で学んだことは、あまり物がない中で、そこにあるものを使ってどう改善していくかということ。これが大きいですね。トラブルが起きた時、課題がある時、その時々で何ができるかを考える。そういうマインドは、日本の社会や生活のなかでも必要だと思います」。



帰国したばかりの頃、沼川さんは、日本社会のスピードに慣れるのに大変だった。「オンスケジュールで働く日本は、改めてすごいと思います。でも、それが当たり前になってしまうとスケジュールを実現するための仕事が増えてしまう。そういった意味では、セネガルの人々のようにスケジュールなしで物事を実現させてしまう文化も、ある意味ヒ

与えるよりも与えられることが多かった それまでの考えを大きく変えた体験



沼川さんの赴任先は、セネガルの首都ダカールにある ISM ビジネススクール。ここで PC インストラクターとして大学内のネットワークをつなぐ IT 整備を行った。配線を整え、無線 LAN に切り替えるなどの作業を進め、大学で行われる日本語の授業の教材づくりも手伝った。協力隊の活動後、沼川さんは、アフリカの国々への考えが変わったと話す。「協力隊で活動するまでは、こちらから途上国の人々に何か与えることが多いと考えていたのです。でもそれは違いました。むしろ、セネガルの人々から


僕に与えてもらったことのほうが多かった。同じように、ボランティアに対する考えも変わった。「たとえ自己満足だったとしても、何か役に立てることはある。ボランティアには何より気持ちが一番なのだと分かりました」。自身の活動を通して、沼川さんは視野を大きく広げた。



ントになるかもしれません。日本とセネガルの中間、ほどよい働き方を目指すことができればいいですね」と働き方に一石を投じる沼川さん。そのしなやかな目線に、遠いセネガルでの体験が生かされている。
「帰国後にはセネガルの学生による訪日スタディツアーを企画し、その中で弊社社員と、日本とセネガルの働き方の違いについてディスカッションしたりしました。今後

も日本企業で働く日本社会の一員として、途上国とどう関われるのか、お互いにどう学びあえるのか、考えていきたい」。沼川さんは、語ってくれた。



上司に聞いてみた!  good job!

沼川さんは、自分なりの考えを示し、周囲との調和を意識して業務を進めています。新しいメンバーや顧客とのコミュニケーションが求められる場面でも臆せずに会話を広げていく姿は、協力隊の活動で培われたものだろうと感じます。今後は、海外の現地法人とのやり取りも出てきますが、今の役割や立場を超えて世界を広げていってほしい。そのために、しなければならないことを考え、実行することがメンバーにも刺激になり、ひいては組織力の向上につながっていくと考えます。

SCSK 株式会社 IT マネジメント事業部門 基盤インテグレーション事業本部
流通基盤インテグレーション第一部 第一課長 **飯出 昇平**さん



子どもたちの心を
世界へ広げ
身近な人とつなぐ。

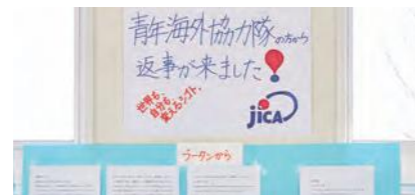
兼光三郎

総合学習の時間で 子どもたちの視野を 世界へ広げる

大阪府北部の茨木市。静かな住宅街に東奈良小学校はある。この学校に着任して1年目の兼光三郎さんは、4年2組を担当している。子どもたちが心身ともに成長できるように知識や情操はもちろん、自他を尊重する意識や他人への思いやりなども涵養する。そんな小学4年生の総合学習の授業で兼光さんは、国際理解を取り上げた。自身が2011年から2年間、青年海外協力隊に志願し、モザンビークで活動した経験をもつからだ。

総合学習とは、自ら学び、考えて主体的に判断し問題解決していく能力を育む学習。子どもたちが意欲的に世界の国々を調

べることができるよう、兼光さんは、子どもたちに各国で活動する協力隊員へ手紙を書いてもらうことにした。正しい手紙文の書き方を学び、それぞれが途上国で活動する一人ひとりの隊員へ応援メッセージを送るというものだ。好きな国を選んで手紙を書くのだが、ブータン、ガーナ、ペリズ、サモアなど多くの途上国の情報は、図書室にほとんどない。「食べ物は何ですか?」「子どもはどんな勉強をしますか?」など素朴な疑問を添えてメッセージを送った。すると、各国の隊員からお礼と質問に対する答えが返ってきた。



4年2組の廊下には、世界中から届いた手紙が貼られている。鮮やかな民族衣装を纏った隊員の姿や、見たこともない料理、肌の色が違う子どもたちの笑顔など子どもたちが初めて見るシーンばかり。今、同じ時間を過ごす世界各国の様子は、どんな資料にも載っていない生の姿だろう。



「図書室にもネットにもない情報を子どもたちに知ってもらう機会となりました。諸外国に関心をもつきっかけとなったようで、やって良かったと思っています。」兼光さんは、子どもたちの様子に手応えを感じている。

赴任地 モザンビーク 赴任地での職種(活動分野) 幼児教育



茨木市東奈良 大阪府茨木市立東奈良小学校 大阪府公立学校教員

短大卒業後、摂津市の私立幼稚園に教員として3年間勤務。退職後、幼児教育の指導で青年海外協力隊としてモザンビークへ。帰国後、通信教育課程で学び小学校教員免許を取得。2015年、大阪府小学校教員採用試験に合格し、2016年4月より茨木市立東奈良小学校に勤務する。

人と人のつながりをもつ その大切さを まずはこのクラスから…

兼光さんは、高校の時に青年海外協力隊のことを知り、協力隊を目指すために進路を考えた。もともと子どもが好きだったこともあり、幼稚園教諭として社会経験を積んでから活動に参加した。けれども、帰国が近づくにつれて、「幼児期よりも学童期の子どもたちのほうが、協力隊の活動経験を伝えることができるのではないかと考えるようになった。そして、帰国後に教員免許を取得し、晴れて小学校の教員となった。兼光さんは、途上国の活動で感じたことを、多くの子どもたちに伝えていきたいと考えている。

「僕が現地が一番感じたことは、人と人の絆やコミュニティの強さです。モザンビークでは、大家族で暮らし、親族や近所の人々との結びつきがある。バスに乗れば、誰ともなく歌い出してハーモニーを奏でる。そんな現地の人々に比べると、日本では人間関係が希薄だと実感します。だ

衛生面の改善案に現地は「ノー」 自分がやり続けることで利点を示した



兼光さんの赴任先は、モザンビークのナンブラ市。園児約200名の公立幼稚園に勤務し、保育活動や研修会開催、衛生指導などを行った。兼光さんが心配したのは衛生状態の悪さだった。その一つに、昼食前の手洗いでクラス全員が1つの桶で手を洗っていたことがある。「水差しを使って一人ずつ流水で洗う方法を提案しましたが、園長をはじめすべての先生からノーと言われて…。先生たちにとっては、40人分の流水を準備するのが手間だったので。」そこで兼光さんは、自身が受け持つクラスの子どもたちに流水で洗う大切

さを教え、水汲みを手伝ってもらいながら1年間続けたそうだ。すると、保護者から「この1年、子どもの体調が良かった」と声があり、そこから園の先生方もこの方法に注目するようになった。正しいと思うことをやり続けた兼光さんの行動が、改善へとつながったのだ。



からこそ、子どもたちに人と人のつながりを意識しながら成長してほしい」と兼光さんは話す。まずは、受け持つクラスの子どもたちに40人というコミュニティで人間関係を築いてほしいと考えている。

「僕がそのきっかけを一つでもつくっていければと思います。協力隊の活動は、赴任地のモザンビークで終わったわけではありません。現地で培ったことを、ここ大阪

の小学校でどう還元していくかです。それが本当の意味での活動ですから。」兼光さんの活動は、日本の新たなステージで始まったばかりだ。



上司に聞いてみた!



大阪府茨木市立東奈良小学校 校長 泉 章子さん

私自身、開発途上国の教育事情に関心をもっていましたので、兼光さんが本校に赴任してくるのを楽しみにしていました。彼は社会経験もあり、協力隊に参加するなど自分の考えをしっかりと持っているのを感じます。この1年間で、彼がコツコツと物事を積み上げていくタイプだと分かりました。ぜひ、子どもたちに協力隊での活動経験を話してもらって、彼の生き方を通して誰もが世界に飛び出してその国に貢献できるんだということを伝えていってほしいです。



大学と海外の現場 学生たちの 学びの往還を支える。

北川 亜友美

学びを通して 社会にも日本にも 貢献できるのが大学

大阪府寝屋川市にメインキャンパスのある摂南大学は、7 学部 13 学科、大学院 6 研究科をもつ総合大学。教育理念に「人間力・実践力・総合力を養い、自ら課題を発見し、そして解決することができる知的専門職業人を育成する」を掲げ、高等教育を行っている。北川亜友美さんは、同大学の国際交流センターに勤務する大学職員だ。現在は、在学生に向けて短期留学を中心とした大学独自の海外派遣プログラムの実施と、アジアをはじめとする各国からの留学生の受け入れをサポート。留学生の奨学金の事務手続きなども担当してい

る。「私自身、海外でのフィールドワーク、インターンシップ、そして青年海外協力隊の活動などで異文化に触れる経験を積んできました。大学という職場を選んだのは、学びを通して、日本と海外の国々をつなげる様々な可能性がある場だと考えたからです。次世代を担う学生たちに、多くの異文化に触れるチャンスを持ってもらいたい」と北川さん。

昨年、北川さんは、メキシコで行われた海外派遣プログラムに引率者として同行した。今後は、プログラムの企画を立てる段階から携わり、海外への引率も積極的にやっていきたいと話す。

「国内外を問わず、現場で社会の課題に触れ、それを学内の学びに持ち帰り、その課題解決に向けていかに貢献

できるのかを模索する力が必要だと考えます。今の学生たちは、用意されたものをやるという受け身の姿勢でいるようにも感じます。学生たちが自ら考える力を養うためにも、海外留学などの体験学習は大切だと思います」。そして、「外に



出たからこそ、それまで当たり前だと思っていた日本の良さ、逆に日本社会の課題も見えてくることでしょう」と北川さんは話す。

赴任地
ラオス

赴任地での職種(活動分野)
村落開発普及員



寝屋川市池田中町
摂南大学
国際交流センター

大学院で国際関係研究科博士前期課程を修了後、滋賀県にある大学の職員として2年間勤務。退職後、かねてから希望していた青年海外協力隊の活動でラオスへ。帰国後、2010年より兵庫県にある大学に5年半勤務。2015年より常翔学園の職員となり、現在は摂南大学国際交流センターに勤務する。

海外とつながる仕事は 日本においても可能 留学の支援という道を歩む

学生時代から途上国で過ごした経験のある北川さんだが、多くは1〜2ヵ月の滞在で、現地では、いわばお客様扱いのようなところもあった。就職した後



も、いつかは途上国の人々とともに生活しながら活動したいという思いがあり、2年間働いた後に、退職して協力隊の活動に参加した。赴任先で出会ったラオスの人々が、自国や生まれ育った地域に誇りを持って働く姿をまぶしく感じた北川さんは、自分も帰国後は日本の社会のために働こうと気持ちを新たに、大学職員としての道を歩む。

味方になってくれる人は必ずいる
その言葉を信じて協力者を探した



北川さんの赴任先は、ラオス南部のアタプー県の教育局。初代の協力隊員であったため、活動に適した所属課と仕事のパートナーを探すことからスタート。北川さんは局内の各課を一つ一つ回るなかで、学校教育の管理担当者に会い、仕事のパートナーになってもらって県内6つの小学校で活動を開始。公開授業



による教員研修や、支援物資の歯ブラシの配布に合わせた歯磨き指導などを行った。そんな北川さんの行動を支えたのは、協力隊の派遣前研修の先生の言葉だったという。「最初から赴任先の組織全体で、あなたの意見に賛成することはないでしょう。でも、一人はあなたの力になってくれる人がいる。まずはそういう人を探すこと」と助言があったそうだ。これから協力隊を目指す人に「どんな職場でも、自分の味方になってくれる人は必ずいると信じて前に進んでほしい」と北川さんは話す。

「国際交流センターが取り組む海外派遣プログラムは、学生が異文化に触れて多様性を理解しようとする第一歩です。海外での体験を通して、学生は自分に足りないものを知り、社会の課題も見えてくるでしょう。学内と学外(国内外)の『学びの往還』をこれからもサポートしていきたい。そして、留学派遣プログラムが終了して全てが終わって

しまうのではなく、学生たちがプログラム終了後も学び続けることができる仕組みもつくっていきたい」と北川さん。

自身が得た多くの体験を糧に、異文化に触れ、多様性を理解することの素晴らしさを学生たちに伝えていきたいと語る北川さん。国際交流や多様性の理解への扉を次世代に向けて大きく開いている。



上司に聞いてみた!



国際交流センターには、留学を希望する学生と海外からの留学生、両方が訪れます。北川さんは、手のかかる留学生に対して、まるで母親のように接しています。単に優しいだけでなく、日本の日常生活に必要なことを留学生が自分で行えるように上手に促しているのです。現在は、奨学金業務をこなしてもらっていますが、そんななか、去年はプログラムの引率としてメキシコへ行ってもらい、彼女のタフな面を見せてもらいました。これからは持ち前の逞しさを発揮してもらいたいです。

摂南大学 国際交流センター 課長 市富 亜紀子さん

愛される職員になる。
大阪で人々を支える
エネルギーシユな
佐々木菜実



大阪南港の府庁舎
「さきしまコスモタワー」を
人々で賑わうランドマークに

コスモスクエア地区にそびえる 55 階建ての大阪府咲州庁舎。愛称「さきしまコスモタワー」だ。地上 252m にある展望台からは、明石海峡大橋や関空、徳島県も見渡せるパノラマの景色が広がっている。このビルを管理運営しているのが、大阪府総務部 庁舎室 庁舎管理課。佐々木菜実さんは、2016 年 4 月からこの部署に勤務している。

佐々木さんの業務は、大阪府咲州庁舎の施設管理と活用、その両方だ。庁舎施設管理のためにデスクワークにとどまらず必要があれば庁舎内を駆け回り、一方では、庁舎活用のためにテナント

を募集するなど幅広い業務を行っている。「さきしまコスモタワー」が府庁舎としての役目を果たすのはもちろん、国内外の大阪を訪れる人に親しみをもってもらい、多くの企業やテナントによって活用されることがミッションだ。

「大阪は、世界に誇れる国際都市。でも、古墳などの歴史も深く、笑いなどの文化もある。いろいろとミックスされていてワクワクします。私は大阪出身ではありませんが、よそ者だからこそ気づく部分もあると思い、ここで仕事がしたいと思いました」と明るく答える。

もともと高校の英語教員だった佐々木さんが、公務員の道を目指したのは、青年海外協力隊の活動がきっかけだったという。「赴任地のガーナで青少年活

動をするうちに、教員時代とは違った『教えることがうれしい』ことを実感しました。自分は誰か人のためになることをしている時にモチベーションが高く、それが合っていると感じたのです」。帰国後は、人の役に立てることは何かと考え、行政の仕事を目指した。



協力隊の活動で得た精神力
国際化の進む大阪で将来は
府民と海外をつなぎたい

協力隊で赴任したガーナで佐々木さ

赴任地
ガーナ

赴任地での職種(活動分野)
青少年活動



大阪市住之江区南港北
大阪府 総務部

庁舎室 庁舎管理課 咲州庁舎管理グループ

大学を卒業後、香川県で高校の英語教員として 1 年間勤務し、その後、青年海外協力隊の活動でガーナへ。帰国後、大阪府職員行政職、社会人枠で採用され、2016 年 4 月より総務部 庁舎室 庁舎管理課に勤務。

んは、最初の 3 ヶ月間はホームシックになるほど辛かったという。水道もない、電気も不安定、食事にも口に合わないなかで『慣れるしかない』とふんばった。水汲みは、近所の子どもたちに手伝ってもらったと振り返る。「開発途上国で日本と同じような環境で暮らすことは難しい。そこで、自分の心持ちを変えてみました。例えば、食事は『場』を楽しむもの、不便さは日本にはない暮らしの体験と割り切ってみました。すると、ぐっと活動しやすくなりました」。

小学校の青少年活動で行ったのは、ダンスやクリエイティブアート。体育や音楽、図工などの情操教育を授業として行った。だが、現地では科目として認められていない分野だけに、遊びと見られて軽視されていた。「とにかく地道にコツコツと続けました。毎週同じ時間に毎週きちんと授業を行う。ただそれだけです。授業の大切さを生徒にも教員にも伝え、周囲に協力してほしいと働きかけました。諦めずに続けることで、周囲も変わってきたのです」。地味な作業を続けること、

「教えることがうれしい」
ガーナでの活動が自信につながった



佐々木さんは、ガーナの南部にあるセンヤ・ベラクという小さな漁村にあるマザーテレサ女子校の小学部で情操教育の普及活動をした。「最初は、体育の授業といっても遊びの延長のように思われて、ぐちゃぐちゃで準備運動すらできない状況でした。2 年かけてようやく、子どもたちが整列や号令もできるようになり、真剣に取り組めるようになりました」と達成感を語る佐々木さん。そして、子どもたちが目を輝かせてダンスや手芸に取り組む様子は、佐々木さんの心を動かした。「もっともっとやりたいと言わ

れて、私ももっともって教えたいと思うようになりました。教えることがこんなにうれしいことだとも思っていませんでした」と当時を振り返る。人のために活動する喜びは、今も佐々木さんの心に刻まれ、そして、佐々木さんの自信につながっている。



積み上げていくことは、確実に自分の力になることを佐々木さんは体得した。



「できれば、協力隊での経験を生かして、将来、大阪府民と海外をつなぐことに携わりたいと思っています。でもまずは、条例や法律など行政職としての知識を積んでいきたい」と夢を語る佐々木さん。夢の実現に向けて今、英語に加え、中国語も習い始めた。そんな佐々木さんには、持ち前の笑顔に負けにくい、やる気とスタミナがあふれている。



上司に聞いてみた!

佐々木さんは、受容性が高く、彼女から「できません」という言葉を聞いたことがありません。また、感じたことを私たちに素直にぶつけてきてくれるので、新鮮な視点が加わりました。物おじせず、コツコツと取り組む姿勢は、協力隊の経験によるものでしょう。組織は、佐々木さんのような一人ひとりの「人」で成り立っています。彼女は、これから府庁でさまざまな部署を経験していくでしょうが、持ち前のポジティブな思考を失わず、これからの大阪府を背負って欲しいと思います。



大阪府 総務部 庁舎室 庁舎管理課 咲州庁舎管理グループ
咲州庁舎管理補佐 三和 利恵子さん



住民主体の 地域活動を支える 力強い地域をつくる。

山田 浩太

主役は住民。 だからこそ持続発展的な 地域コミュニティづくりを支援

河内長野市は、大阪府の南東端にある府内で3番目に広い面積をもつ市。人口約11万人、約4万7000世帯（平成29年1月）が暮らしている。大阪市内から電車で30分と近いながら、緑豊かな山麓エリア「奥河内」が広がり、高野街道などの歴史を感じるスポットもある。山の稜線は美しく、金剛葛城山系を縦走するダイヤモンドトレールもあり、全国からハイカーが訪れている。

ここ河内長野市の市民生活部自治協働課に所属し、同課で4年目を迎える山田浩太さん。現在の主な仕事は、市内の各小学校校区に設置されている地域まちづくり協

議会の活動支援や、自治会などのコミュニティ活動の支援。地域住民と一緒に取り組んでいる。

「住民の方々が、地域活動に主体的に取り組めることを第一に、人と人とのつながりや地域資源を活かしながらまちづくりを行う仕組みづくりを進めています。住民の方々は、自らが暮らすまちをより良くしようと考え、さまざまな取り組みを実践されています。主役はそこで暮らす住民で、行政はともにまちをつくるパートナーにならなければいけません」。



人の暮らしを支える業務 タンザニアの経験を生かし 人と人のつながりを重視

山田さんは、河内長野市の出身だ。地元への思いはあるだろうが、市の職員として働こうと考えたのはなぜか。「青年海外協力隊の活動でタンザニアへ行きました。そこでの地域活動で、その国、その地域、その村にそれぞれの暮らしがあり、人々のつながりによって暮らしが支えられていることを知りました。帰国後は、地域の暮らし、人のつながりを支える仕事をしたいと思い始めたのです。そこで、住民の暮らしに直接携わることができる市役所の仕事を選んだのだ」。

一方、近年懸念されている地域のつながりの希薄化についても山田さんは話

赴任地
タンザニア
赴任地での職種（活動分野）
理数科教師



河内長野市原町
河内長野市 市民生活部
自治協働課 市民協働係

大学を卒業後、営業職として電子系専門商社に3年間勤務。退職後、青年海外協力隊としてタンザニアへ。帰国後は、出身地である大阪府河内長野市の職員に。2013年4月より、市民協働室（現在は自治協働課）に配属、現在に至る。

してくれた。「地域のつながりを深めるためにも、地域のアイデンティティー（＝そこで暮らす意義）を築き、いかに力強い地域をつくっていけるかが大切だと思います。そのためにも、まずは私自身が地域への思いを住民と共有すること。その上でともにまちづくり活動に取り組んでいきます」。

住民が主体的に取り組めるように支えるこうした活動は、協力隊の時にタンザニアの村で取り組んだことと通じるものがある。山田さんは、協力隊の活動と同様、地域の中に飛び込んで、信頼関係を築いている。

「市民同士、また市民と行政がそれぞれの役割を果たしながら協力・連携し、課題の解決を目指し、ともに取り組んでいくことが重要です。しかし、住民の方々にもいろいろな立場や状況があります。とくに河内長野市は、古くからの村落地域と新興開発された住宅地など文化も暮らしも異なる人が、同じ地域で暮らしています。それぞれの意見を踏まえて合意形成を図るには、焦らず、じっくり住

貧しくとも明るいタンザニアの人々 昔の日本の家庭のような温かさがあった



山田さんは、協力隊の活動でタンザニア南東部ムトワラの小さな村に赴任。日本でいう中学生、高校生の生徒に数学を教えた。理解度の低い生徒から進学のための国家試験対策まで幅広い指導をした。

一方、暮らしては、村に電気が通っておらず、水道は断水が多く、住まいは土壁。夜は真っ暗になり、小さな灯りに家族が集まって食事をする状況だっ



た。だが、それでも人々には笑顔が絶えず、楽しそうな様子に山田さんは驚いたという。「まるで、ひと昔前の日本の田舎のような雰囲気。物資は乏しいですが、当たり前のように助け合う文化があり、今の日本にはない温かさを感じました」。

そして、これから協力隊を目指す人には厳しい言葉も寄せた。「協力隊の経験は、日本での生活では得難い貴重なものです。しかし、活動や生活は考えている以上は大変。中途半端な気持ちで参加すると後悔するかもしれません。活動にはそれなりの覚悟も必要だと山田さんは教えてくれた」。

民と話し合っていくことも必要です」と山田さん。

海の向こうで取り組んだ地域貢献の活動経験は、山田さんが今取り組んでいる、ふるさと河内長野市の住民との信頼関係の構築で役立っているようだ。「少子・高齢化が進み、日本の各地域は厳しい状況にあります。でも、そんな地

域が元気になれば、大阪全体も、そして日本全体も必ず良くなるはずですよ」。

山田さんは目を輝かせて語る。



上司に聞いてみた！



アフリカという文化も暮らしも違うところに飛び込んで、ダイナミックな経験をしてきた山田さん。彼が河内長野市で取り組んでいるのは、できる人ができることをやっという住民主導の仕組みづくり。住民の方々の要望を受け止め、行政の取り組みを地域に伝え、担当する部署と一緒に取り組むなど、バランス感覚が求められるポジションです。山田さんのいいところは、できない理由でなく、できる方法を考えること。そういった課題解決に向けて意欲的に取り組める人は将来、市役所の中でも活躍していくでしょう。

河内長野市 市民生活部 自治協働課 課長 緒方 博さん



関空の検疫所で 感染症から 日本を守る。

高橋 永知

空港の検疫官として 渡航者の様子や症状を 素早く判断する

高橋永知さんは、関西国際空港で働く厚生労働技官。看護師だ。空港職員と似ている制服だが、エンブレムには「QUARANTINE」、すなわち「検疫」が記されている。日本で3番目に広い関西国際空港には、LCCの就航やビザ緩和などで海外からの渡航者が増え、3つの検疫検査場において、約50名の検疫官が365日24時間体制で検疫業務を行っている。飛行機を降りた渡航者は、入国審査の前にここで検疫を受ける。検疫官は、渡航者の自己申告書や体温を示すサーモグラフィをチェックし、顔色や発疹などの症状も厳しく目視

する。海外でまん延しているデング熱やマラリア、エボラ出血熱などの感染症を日本国内で広めないため、水際で防ぐのが目的だ。



「法律で定められている13の検疫感染症について、り患の可能性があれば、健康相談室で問診や健康状態のチェックをします。医師の判断のもと、検査のために採血をする場合もあります。人から人へ感染する感染症はとくに注意します。このほか、ラクダが媒介するMERS（中東呼吸器症候群）がありますが、た

とえ中東への渡航歴がなくても乗り継ぎで利用した際にかかってしまう場合もありますので留意してほしい」と高橋さん。得意のイラストでポスターを作成し、空港内でMERSに関する呼びかけも行っている。

協力隊を目指した ブレない思いが 国を守る仕事につながる

高橋さんは、高校卒業後、東京で服飾関係の仕事に就いた。店長も任される多忙な日々だったが、そこで運命の出会いがあったという。「青年海外協力隊から帰国したばかりの人が来店したので。たった10分ほどの会話でしたが、途上国の人々のために活動してきたとい

赴任地

ウガンダ

赴任地での職種(活動分野)

感染症対策



泉南郡尻町

厚生労働省 関西空港検疫所 厚生労働技官・看護師・公衆衛生修士

高校卒業後、東京の服飾関係の会社で約4年間勤務。一念発起し、静岡県の看護専門学校へ。看護師資格を取得後、静岡県の県立病院で2年間勤務。2010年から青年海外協力隊の活動でウガンダへ。帰国後、大学院の公衆衛生学研究科へ進学。2014年厚生労働省入省。同年より検疫官として関西国際空港で勤務する。

う話を聞いて衝撃を受けました」。それから、高橋さんは協力隊の活動を目指して看護専門学校に入学。看護師の資格を取り、出身地の静岡県の病院で看護師として経験を積んだ。途上国では、医療現場での支援を求めていると聞いたからだ。6年に及ぶ準備を経て、念願叶い協力隊の活動へ。赴任先のウガンダで高橋さんは、感染症の啓発と保健衛生の活動を行った。「その地域で長い間培われてきた文化や慣習もあり、行動様式を簡単にかえることはできません。衛生面で最低限必要なことや、病院での5S導入により作業効率を上げるメリットなどを説明し、できる限りの改善策を提案していきました」。正しい方法だからといって、それを押し付けることはしなかったようだ。帰国後は、公衆衛生学の研究をするため大学院へ進学した。

「現地のフィールドワークで感じたのは、自分が収集したデータの精度や分析能力をもっと高めたいということでした。感染症を含めた公衆衛生学を学びたいと考え

看護師の資格をもって協力隊へ 現地で体得したのは多様性の尊重



高橋さんの赴任先は、ウガンダのブシア県。県庁保健課に所属し、HIV啓発活動（エイズ予防教育）とマサフ病院などで5S普及活動を行った。啓発活動では日本の看護学校などとスカイプでディスカッション、病院では5S促進グループを立ち上げて、スタッフの環境改善意欲を高めた。「苦労したのは、現地の風習でした。風邪をひいたら皮膚を切り、傷口に野草をあてると風邪が治ると信じられていたのです。皮膚を切るブレードというカッターの使い回しは衛生上良くない。悩んだ末、高橋

さんは彼らと話し合い、使用したブレードを捨てる箱を用意し、その横に滅菌済の新品のブレードを置いた。「このことに限らず、僕らができるのは、彼らが納得できる改善策をいかに提案できるかでした」。高橋さんは、協力隊の活動で地域による多様性を改めて感じ、世界観を広げた。

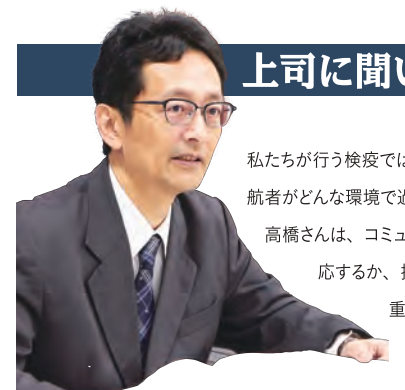


たのです。そして、大学院在学中に検疫官と出会い、感染症が持ち込まれるのを水際で防ぐという方法があることを知り、この仕事に就こうと決めました。



協力隊の活動を経て、職業を大きく変えた高橋さん。今後の目標について尋ねると、「2020年の東京オリンピックに向けて、世界各国の人々が日本にやってきます。私たち検疫官も検疫を強化し、日本を感染症から守ります」と答える。飾らない笑顔がまぶしい高橋さん。その眼差しの奥には、強い意志と使命感があふれている。

上司に聞いてみた!



関西空港検疫所 企画調整官 垣本 和宏さん

私たちが行う検疫では、日本に入国する世界各国の渡航者に接します。このため、渡航者がどんな環境で過ごしてきたかを推し量って対応しなければなりません。高橋さんは、コミュニケーション能力が高く、単に言葉だけでなく、短時間でどう対応するか、接し方そのものが身に付いているようです。協力隊の活動で積み重ねてきたものだと聞いて、感心します。さらに、海外の医療情報にも強く、公衆衛生の知識も持ち合わせている。彼には、安心して業務を任せられます。



青年海外協力隊

検索

<http://www.jica.go.jp/volunteer>

独立行政法人 国際協力機構 (JICA) 関西国際センター
〒651-0073 兵庫県神戸市中央区脇浜海岸通1-5-2
Tel: 078-261-0341 (代) Fax: 078-261-0357

